

「現代形而上学概説」

第一回(20111006)

[シラバス]

古代ギリシアにおいて哲学の基礎は、第一哲学と呼ばれた「形而上学」(メタフィジックス)でした。しかし近代に登場した認識論や20世紀に登場した言語哲学のために「形而上学」は衰退していました。ところが、最近形而上学がふたたび脚光を浴びています。現代の形而上学の紹介をしながら、なぜ現代において形而上学が注目されるようになったのかを考えたいと思います。

以下のトピックについて概説します。

- 1.因果性
- 2.時間
- 3.人格の同一性
- 5.自由意志と決定論
- 6.心と脳
- 7.実在論 vs 反実在論
- 8.存在するとはどういうことか
- 9.形而上学とはなにか

-
- 1、世界には何が存在するのか
 - 2、個別的な対象以外に普遍が存在するのか
 - 3、すべてのものには原因があるのか
 - 4、過去や未来は存在するのか
 - 5、意志の自由と決定論

1、形而上学とは何か？

(1) 哲学とは何か？

通常よりもより深くより広く考えること

通常よりもより深い問いへの答え、根拠・原因・理由への問い

通常よりもより広い問いへの答え、より普遍的なものへの問い

[アリストテレス]

原因への問い

形相因、質料因、動因、目的因

存在としての存在とその属性

第一哲学、形而上学

①人生論：生きることの意味は何か？

道徳論：いかに生きるべきか？

②存在論：世界はどうなっているのか？

世界には何が存在するのか

存在するとは、どういうことか？

時間、因果性、必然性、可能性、とはどのようなものか？

③認識論：われわれは世界や人生やをどのように認識するのか？

言語哲学：言語が意味を持つとはどういうことか？

理由を問うことは：人生論や道徳論になる、それを普遍的に問うことは、社会哲学・政治学になる。

「人が生きるのは何のためか」「人はどう生きるべきか」→「社会はどうあるべきか」

原因を問うことは：自然科学、社会科学になる、それを普遍的に問うことは存在論になる

根拠を問うことは：認識論、言語哲学になる。それを普遍的に問うことは論理学になる。

自然科学は経験的、形而上学は非経験的、

理由を問うことは、目的因を問うことである
原因を問うことは、動因を問うことである。
根拠を問うことは、??

孫正義新30年ビジョン

100年後のコンピュータチップのトランジスタの数(人間の脳のシナプスの数1ガイ倍(1兆×1億倍))
2030年のコンピュータチップのトランジスタの数(人間の脳のシナプスの100万倍)
2018年のコンピュータチップのトランジスタの数300億
人間の脳のシナプスの数300億個
チンパンジーの脳のシナプスの数 80億個
昆虫の神経のシナプスの数100万個
アメーバ1個

人類史上最大のパラダイムシフトが今後300年間でやってくる

注1:Aristoteles BC384-BC322

Metaphysica 『自然学的なもの後にくるもの』『自然学の後にくる書』

14巻からなる書物(これは、最初からまとまった書物であったのではなく、後世の学者が、200年後くらいに論文を集めて、一書とし、それに Metaphysica と名付けたものである)

第一巻:

第一章「知恵ないし哲学は第一の原因を対象とする棟梁的な学である」(第一章)

第二章「思考の知恵の本性と目標」

第4巻

第一章「存在としての存在とその自体的属性を対象とする学があらねばならない」

「諸存在の最高の原因を求めるわれわれの学(第一の哲学)は存在を存在として研究し、その第一の諸原理を求める。」

第二章「第一義的存在、すなわち実体を研究し、またその諸属性、一と多、その他それから派生する種々の対立的根本概念を研究せねばならない。」

第三章「実体の他に、論証の諸前提、諸公理、ことに矛盾律についても考えねばならない。」

第6巻

第一章「存在としての諸存在の原理や原因をもとめる」

第二章「存在の4義、(1)付帯的存在、(2)真としての存在、(3)述語形態としての存在、(4)可能的存在と現実的存在、」

第7巻

第三章「一般に実体と認められているのは、本質、普遍、類、基体の4つである。」

第17章「真の実体は、形相である」

哲学＝原因の研究

第一哲学＝存在としての存在とその自体的な属性の研究

第一義的存在＝実体の研究

第一実体を個別的な実体とするのか、普遍的な実体とするのか

第一原因の究明

存在のもつ10の基本的性質

実体、量、質、関係、場所、時間、位置、状態、能動、受動